
鬼燈

士功征宗

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

鬼燈

【コード】

N3031A

【作者名】

土功征宗

【あらすじ】

○季節外れの鬼灯は、白い雪上に紅く染め上がった。鬼の御霊はとおりゃんせ。さ迷う女の軀は、まるで夏の蛍のように舞う雪虫の誘いとともに、提灯の燈に似た鬼灯を摘み紅く染まる。愛しき者を待つ御霊を、かつて如何なる刃をもってしても掠り傷一つ付けられなかった地獄の鬼の角を斬り落としたと伝わる名刀“角落とし”を腰に携えた流浪人に浄化を求めたのであった。どの地方にもよく聞く昔話のひとつです。ジャンルを歴史にしたのは、物語の源が実話を元に構成されていたためです（盗賊征伐） 郷土資料提供、昭

鬼燈

和・伊原哀護 / 著、
(、) y -
前トキしろつ

(前書き)

鬼灯ほおずき・ナス科の多年草。時期は主に初夏。例外もあり。果実は球形で袋状の萼に包まれて赤く熟す。種子を除いた果実の皮を口に含んで鳴らして遊ぶ。古来、中国では子供が持つ提灯に似ていることや、口に含み頬づきからなどの由来がある……

女の輪郭は夜の闇に朧である。

月が光彩を放ち、秋に見える広めたうろこ雲の行雲を浮き彫らせる夜の折り。

そんな月光の微かな明かりにも照らされぬ女は白い着物に紅い斑模様を滲ませ、手には季節外れの赤く熟した鬼灯を狭み、暗く枯れた桜木道を素足のまま覚束ない足取りで歩んでいる。その後には少しばかり早期の雪虫がまるで人魂の燈のように静寂に漂っていた。

「鬼だ。鬼が出た」

村人は度々現れるその女を“鬼”と呼び称し恐れ戦慄していた。

「また現れたか」

村人は翌朝早くから集い、口々に女の噂を語りだす。

幾度となく現れては血色に染まる白裳に気味の悪さを憶えては、背中に冷水を滴らせたような悪寒と焦燥に耐えなくてはならない。

「即策を講じなければこの村だけでなく、隣の村々までも若い衆が女の餌食となる」

事は急を要していた。

鬼に喰われ若い者が村から消え失せることは、何れ村が衰退することを予兆している。

女がその容姿を現す度に幾度となく策を講じてみるが果敢く散っていた。

そこで何か知恵はないかと思考する村人達は村の長寿である孫六に相談する事に結束した。

鬼燈

翌日、孫六の家屋の前に大概の村人が群がり、拝むように頼りの念を講じている。

群がる大衆に気付いた孫六は老退した足をおぼつかせながらも姿

を見せ濁った声を発した。

「現れたか……」

事を既に悟っていたかのような口振りに村人は驚を隠せない。

「孫爺、知ってたのか？」

白濁した眼は何かを見透かしているようだった。

「目は見えんでも、気配は感じておった」

そう語る孫六だが、事の起りは既に承知するところ。

孫六は敢えて村人に実弁を口外する事は避けていた。

前夜に女と共に姿をみせ舞いはじめた雪虫の知らせに空をどんよりと滲ませはじめ、紅く頬を染めていた山々が秋季の終を告げるとともに白化粧に染まり、直に村も厳しい冬の到来を迎えることとなる。

「雪つこが舞い始めたの。今年はいつになく早い冬が来るな」

村の皆々がかじかんだ手を擦りながら、吐く息は白く、それが冷えた空気に溶け込んでいく様は村人の不安と恐怖を除きたい願いのように消えていくことを思わせてならない。

「村の衆、夜にまた此処へごそくる願えんかの」

孫六は思い立った言葉を投げ掛けた。

「皆を連れていきたいところがあるでな」

村人達は素直にそれに応じ、一旦は個々の家へと身を帰した。

その夜は凜々と肌身にしみる夜になり静かに雪が無風の中に音もなく降る。村に初雪が舞ったのだった。

孫六の家の板戸を村人が叩くと、待ち構えていた孫六が直ぐ様戸を開けた。

「孫爺、今夜は二人だけできた。この雪だし、夜にぞろぞろ行くわけにもいかんでな」

「それでいいか？ 孫爺よ」

孫六は小さく頷き、

「その声は与吉と由蔵か」

「ああそつだ」

孫六は土間に立て掛けてた数本の松明に火を付けると、二人にも手渡した。

「よもやその方がええじゃる。今から向かうのは寺だでな」

「……」

与吉等は顔を見合わせ、迎う場所を思い当たっていた。

「寂蓮様のところか？」

孫六は頷いた。

わら沓や笠などの支度を終え三人は山奥の寺に足を向けた。

静かに降る雪は粉雪で、さらさらと足元を舞い上がる。

狐火のような松明の火は、雪が触れると微かな音を成し孫六の足を向けさせる目安ともなっていたが、先を急ぐ二人は孫六の手を引き寺へと導いていく。

決して早い足取りとは言えなかった。

その頃、一人の侍が同じ寺に向かっていたことは誰も知るよしはない。

雪夜の闇に冬支度もせず、染み入る雪の冷たさももろともせず歩いている。

頭上の笠には雪が積もり、夜通し歩いていた事が伺えた。

帯に結んだ鈴の音が夜の雪に籠もる。

足を進める度に成る鈴は単調な音を鳴らし、侍に躊躇いなく突き進む様に見え、さらにその鈴の音は雪の夜に調べを奏で、空は深々と小雪を落とす、夜は次第に更けていく。

しかし、侍は妙な気配に気付き足を止め耳を澄ました。

ゆつくりと腰に下がる太刀に手を差し伸べるが、侍はその矛先を反らせた。

鬼燈

侍が頭を上げる最中、笠からの低い目線の先に大きな馬の蹄が見取れる。

笠を指で押上、顔を上げると屈強そうな鎧武者が薙刀を構え侍をじっと見つめていた。

侍は不思議とその姿に殺気はないと感じる。

それが太刀を貫かない理由だった。

「おぬしは伊右衛門か？」

「……左様」

その返答を聞くと、武者は馬から降り立っち、そして深く頭を下げた。

「馬上から失礼であった。拙者、本間道次郎勝正と申す」

伊右衛門は微動もせず、耳を向けていた。

「伊右衛門殿ならば姫君をお救いなされるはず」

「一体なんの話申しなさる？ この地に拙者を知る者もない。然るに何故？」

勝正と名乗る武者は伊右衛門の問いに答えもせず、馬にまたがりだした。

「お任せ申した」

「待たれよ」

伊右衛門は声を張って勝正を留めようとしたが、馬は駆け出した。その時、伊右衛門が何かに気付き言い様のない感覚に陥ってしまった。

「何かの前触れか……」

その言葉を残し、伊右衛門はその場を惜しむように先を急ぎ歩きたした。

「孫爺、寺についたでな」

与吉等が本堂入り口から寂蓮を呼ぼうと入ると、既に寂蓮は待ち構えていた。

「ささ、中へ。外は寒かるうて」

驚きはしたが、与吉等は孫六の手を引き本堂奥の居間へと足を進

めた。

「孫六殿が此処へ来ることは承知しておりました」

人里から少し離れた山の奥に寺はひっそりとあった。

そこに尼僧の寂蓮は日々仏殿で合掌している。

その居間は客人の為の囲炉裏が暖をとっていて、凍みる寒さに曝された者達には居心地の善いものだった。

「孫六殿が村の方々をお連れなさって来ることは、扇姫様の事とお見受けします」

「もはや語るしかあるまいの」

与吉と由蔵は息を呑みんだ。

「では、私からお話致しましょう……」

今から数十年前の事。世は戦国末期。

この村より山を一つ越えたところに小さな山城を構えた諸大名がいた。

君主の名は鹿原盛久。

一揆の加勢を煽り立てし、それがお家断絶を招いていた最中、不服とした家臣数名が、

「このままでは鹿原家共々我らの命も危うい。こうなつては仕方あるまい。盛久の首を召し上げれば、あわよくば我らは自害せず済む」

そして反旗を翻したのが始まりだった。

どの道、鹿原家は絶えると悟つた重臣本間勝正は扇姫だけはと殿の名により逃げ去っていた。

「姫君、拙者がお連れ申す！」

扇は複雑な心境であった。父上母上を置き去りにせねばならなかった事。されど、本間とは密かな恋仲に落ちていたこと。

しかし、迷つて立往生する刻はなく扇は選んだ。

「姫君、風丸から振り落とされぬよう拙者をしっかりと掴んでおられよ」

矢衆が降り掛かる中、二人は駆けた。そう風丸は名馬であった。

瞬く間に山を一つ越え逃げ失せた。

しかし扇は勝正の子を身籠っていた為、暫しの休息をとることにし、小さな湖畔に馬足を止めた。

よたつく扇を勝正は手厚く介抱する。

澄んだ湖畔の水をくみ、分厚く遅しい手のひらで扇に水を飲ませていた。

「勝正、このままどこぞ知らぬ地で二人で暮らせれば、この上ない幸せである」

「そ、そうでござ……」

その時、巨体な体が地に伏せた。

矢衆の中、流れてきた矢が数本勝正の背に甲冑もろとも深く突き刺さっていた。

「拙者も殿に反旗を翻したも同然。報いで御座る……」

「勝正……」

「拙者……いづれは自害しようと思論んでおりもうした……殿のお叱りは必然でしたからのう……」

勝正はほほ笑みながら冷たく凍てついた扇の細い指先を両手で優しく包む。

今にも命の燈が消えそうな時、白い粉雪が勝正の頬に落ち一時の息吹を宿した。

「姫は生きてください。拙者の赤子と共に……」

「なりませぬ！ 勝正、命落としてはなりませぬぞ！ 春には美しい野山で夜桜を見せると申したではないか」

扇は乱舞していた。涙はとめどなく流れ、勝正の泥土に塗れた顔が何時しか洗浄去れるほどに。

「……冬山には何も御座らぬのう……」

「私の……私の行く先を路頭に迷わす気が勝正」

既に勝正の目は闇に包まれ、聡明で白く美しい扇の顔は見えてはいなかった。

「姫、拙者を食べなされ……生きるには冬山には何も御座らぬ……拙者を……」

扇は勝正の体を意図もなくに擦るのがやつのことだった。

「勝正は扇の名が好きでございませよ……呼んでください」

それを聞き取ると、勝正は血に塗れた震える手をそつと扇の腕元からはわせると首から頬にあて、静かな声で言葉を告げた。

「懇情のなごり、扇、共に生きたかったぞ……」

甲冑の音と共に重たい腕は扇に生きた証の暖かい生血を残し、脆くも崩れた。

扇は噉り泣く声もなく、白糸のような涙を永遠に流していた。

いつ頃まで泣いていたであろう。

雪は止み、辺りは白銀と化しており、扇と勝正はそれと同化していた。

静かな時が只々ながれていが、それは刹那であった。

扇は一身に勝正に降り積もった雪を払い、身に纏っていた甲冑を剥ぎ取った。

目は虚ろに見つめる。

そして、醜い迄の音を立て、邪のように貪り付いていく。全身鮮血に染まりながらも血肉を喰い、噉り、臓物までに手を出した。

うええええええ！！

もはや人の声では無かった……

「なんなんだ一体!?!」

与吉と由蔵は寂蓮の話に背筋に悪寒を走らせた。

すると、寂蓮は二人に白湯を差し出しす。

「これで落ち着きなされ」

「も、申し訳ねえ。取り乱した」

寂蓮は二人が心を沈めるのを横目にし終話に向けた。

「扇姫様は空腹を和らげる為と同時に、勝正殿との一体を望んだのでございましょう」

孫六は白湯の碗を手に包み微動だにしない。

「扇姫様はそれにより呪われてしまいました」

寂蓮の話に首を傾げた与吉と由蔵。

「なぜじゃ?」

扇と勝正の辿り着いた場所は、さらに遡る事数百年。この地方は

夷討伐とされ、皆、鬼と下され斬り殺された念が強く根付いた根念の場であった。

その御霊は浄化されず、数百年の月日が邪となり鬼となった。

そこに扇の人道ならぬ行いが、鬼の巢食う宿にされてしまったと言う。

故、赤子は流れ、扇は老けることは無く死ぬことも無く、餓える苦しみと、勝正の元に往けぬ悲しみとに生きながらに地獄をさ迷う事となった。

そして、何時しか扇は悲しみを癒すためか、赤子を欲するようになり、村村を歩きわたっては若い衆を魅了し交わり、その後餓えの苦しみを癒すため男に生きながらに貪り付いていた。

無論、呪われた軀には赤子など宿るはずもない。

鬼と化した扇の道に無残な骸だけが残り、死神の使いにつばまれるだけだった。

しかし、その頃か、勝正の没した場所に年中枯れる事の無い紅く熟した鬼灯が実をなしたのは。

まるで勝正の生き血に染まり熟していたかのように。

「勝正……私は何時、そなたのもとへ……」

孫六の白湯は冷めていた。それでも温めようとするかのように、碗を包む手を離そうとはしなかった。

寂蓮が事の起こりを一通り吐き出し、一同は無言のまま時は流れる。

すると与吉と由蔵は顔を見合わせ、静寂を打ち消した。

「か、可愛そうな話だが、女をなんとかしなければ、村は救われねえ」

と、同時に本堂から人の呼ぶ声に寂蓮は耳を傾けた。

「頼もう！」

誰かが呼ぶ。

「村のお方が誰か来られたのでしょうか？」
すると孫六がぼやく。

「いや、知らん声じゃ」

寂蓮は孫六の顔を一见すると、足を声の成すほうへ向けた。

「どちら様でございましょう？」

すると雪に塗れた伊右衛門がそこに立っていた。

袖からは着衣に凍みた雪が溶けだし、ひたひたと一雫、また一雫と滴っている。

顎の紐を解き笠を外し、深々と頭を下げた。

「拙者、村上伊右衛門と申します。しばしの休息を願いたい」

寂蓮は脇に太刀を添え、見た目には侍だが、どこぞの知れぬ者にも関わらず、奥の間に通そうとした。

「この雪の夜に雪装もせづく。ささ、中へ」

「忝のう御座る。しかし、白湯を一杯いたたければすぐに去り申す」
寂蓮はそれでも伊右衛門を中へと誘う。

「囲炉裏を灯しておりますし、濡れた着衣を乾かしてください」

すると、伊右衛門は押し掛けた上、これ以上寒い場所に尼僧と問答は迷惑と感じ、仕方なしに寂蓮の甘えに応じた。

「忝い」

「私はこの僧で寂蓮と申します」

二人は、そのまま孫六等がいる居間へと進んだ。

寂蓮が障子戸を開け、伊右衛門を中へ通すと、伊右衛門は孫六達に気付いた。

「他の客人も居りましたか。やはり拙者はおいとま致した方が……」
だが、寂蓮にさらに押し込まれ伊右衛門が折れるしかなかった。

伊右衛門は白湯を差し出され、その温さは身体に活力を漲出した。
伊右衛門は孫六や与吉等の顔を一边見渡すと、寂蓮に寺に来る途中の出来事を語りだす。

「寂蓮様。一つ聞きたき事が御座る」

「はい。何なりと」

伊右衛門は白湯を足元にそつと置いた。

「ここはまだ戦場で御座るか？」

「はて？戦どころか、この地は一度も戦場と成り得た事は御座りませぬが……」

妙な事を口走る伊右衛門に与吉等も顔を覗く。

「如何なされました伊右衛門殿？」

伊右衛門は語るのを躊躇うかのような素振りをするが、そのまま続けた。

「実は先程、此処へ立ち寄る途中、不思議な事がござった……」

伊右衛門は目の前に武者が現れ言伝を言い残し去っていった事を話した。

「しかし、不思議と思おたのはその後。去った後には蹄の後すら残っておらなんだ……」

寂蓮は即座に聞き返した。

「名を申しませんでしたか！」

伊右衛門は寂蓮の慌てように驚いたが、目を見るや何かあると悟らずにはいられなかった。

「本間道次郎勝正殿と……」

「やはりそうであったか」

寂蓮は孫六の肩に手を差し伸べた。

「勝正殿が……」

孫六は冷めた白湯を飲み干し、その時口元から漏れた一雫が喉元をしたり、皺に滲んだ。

すると、寂蓮は与吉等に話したことを伊右衛門に刻々と告げる。

「なるほど。そうであったか」

何時しか与吉と由蔵は肩を寄せ合い、居間の隅で震えていた。

寒さからではないのは明らかに。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

伊右衛門はそつと白湯をとり啜った。

そして、足元に置いた太刀と脇差を手に取ると勢い良く立ち上る。

「拙者に何が出来るかしらなんだが、勝正殿の思いは承り申す」

すると立ち上がった伊右衛門に与吉が語る。

「お侍様！やめたほうがいい。幾多の者が挑んでは虚しく散ったのをワシ等は見てきた」

伊右衛門は太刀と脇差を帯に通しながら、

「勝正殿との契りと、温い白湯の礼。それと、侍ではなく、今は只の流浪の身分で御座る……」

そんな事を語っていると寂蓮が割ってきた。

「いいえ、立派なお侍様で御座います。伊右衛門殿は……」

それは何か意味ありげな語り口調であった。

伊右衛門は寂蓮に悟られたと感じた。

「伊右衛門殿は鬼の御霊を鎮められる手足れで御座います」

「知り申したようでございますな」

寂蓮は笑みを浮かべた。

「はい」

「何時……」

寂蓮は言う。

「御名は拝見したときからでございます。さらにはその太刀は名立たる名刀『角落とし』とお見受けいたしました所存で御座りまする」

伊右衛門は太刀を軽く擦って言う。

「なるほど。ならば尚更、拙者にお任せあれ」

そう言い残し、即座に行動を起こした。

見送りとばかりか、寂蓮はその後を追う。

「その身なりで行かれますか？」

それに返答もなく、無言で草鞋をまとい付け立ち上がった。すると、寂蓮に背を向けたまま言う。

「そなた尼僧ではあるが、少しばかり血の匂いがする。何者で御座る……」

寂蓮は驚きはしなかった。むしろ知られて当たり前のような態度で躊躇なく答える。

「さすがは伊右衛門殿」

だがしかし、屈託の無い、素直で清楚な口振りに裏の薫りを漂わせるものではないと、伊右衛門は気付いていた。

雪は何時しか止んでいた。誰も踏み荒らさず積もった白雪は、それはそれは美しく外の世界を一変している。

「……女郎蜘蛛」

寂蓮は一言そう呟いた。

女郎蜘蛛と聞いた伊右衛門は一瞬、目を見開く。

「かの御方の隠密ではございませぬか。なぜこのような山寺に」

寂蓮は静かに伊右衛門に近付き、囁くような声で語りだした。

「この地方に一揆が騒ぎだした折り、我々が隠密として送り込まれ際に、このは村は我らの隠れ里としておりました……」

「しかし、それも昔の話で御座ろう」

寂蓮は笑みを浮かべた。

「はい。戦が終れば世は華と成りました。我らは無用の産物で御座います」

「なるほど」

寂蓮は襟元に手を忍びこませ、黒珠の数珠を取り出した。

「私はこの里に魅入し、戦の犠牲となった扇姫様が不憫で成らず、寺に籠もり微力ながらに鬼の力を押さええておりました……」

伊右衛門は目を閉じていたが、

「皆まで聞くまい。その御助力、大変な器量で御座り、感服する次第で御座る」

「そんな滅相も御座りませぬ」

そして、寂蓮は伊右衛門に数珠を手渡した。

「その昔、位の高い三人の僧が煩惱の数の日を掛け仕上げた『角落とし』には適いませぬが、守護としてお持ちくだされ」

「……すまぬ」

伊右衛門は数珠を襟から懐に忍ばせた。

「では」

伊右衛門が外に足を向けたとき、寂蓮が呼び止める。

「寺、奥の奥、枯れた桜木道に現れます。……どうか扇姫様の御霊を安らかな場所へと誘ってくださいまし」

寂蓮が深々と頭を下げ、ゆっくりと視線を戻した時には、既に伊右衛門の姿も消えていた。

そして寂蓮は小さく呟く。

「それがお父上様の願いでも御座います……」

外界は静寂と白。夜空は晴れ渡り、月が光彩を放っている。杉に積もった雪が微かな音を立てて滑り落ちると、舞い上がった粉雪にその光彩を授け、まるで小さな結晶体となって輝いた。

「静かで御座る」

伊右衛門は寂蓮が言った桜木道に向かい歩いた。

辺りは朧ではあるが木々は月光の下に影を浮き立たせており、伊右衛門の足は瞬く間に進んでいく。

程なく歩くと、その道筋に辿り着き、さらに少しばかり歩くと桜木道に着いた。

雪に埋もれる枯れた桜木道は、美しさと不気味さが交錯する異様な世界。

「……まるで何かの力に誘われたようで御座るな」

伊右衛門は辺りを見渡すと、道の脇に小さな堂が見て取れた。

伊右衛門はその堂に足を向けると木段を上り、観音扉の戸を引き開けた。

かつて何かを祭っていたかのようなだか、今は廃堂となり、隅には古い蜘蛛の巣が埃を張りつかせている。

「一時の雨風凌ぎには適しているの」

そう呟くと伊右衛門は戸を閉め、三段ばかりの木段に雪を払い腰を据えた。

それから、しばしの刻が経っていた。

伊右衛門は刻を余したのか、太刀に手を向け帯から擦り外し、その光沢のある鞘を眺め、横一文字に抜き出した。そしてその洗練された巧みな刀身が姿を現す。

伊右衛門は手首を捻りながら刀身を動かした。

すると、月明かりが刀に息吹を与えたかのように青光を放ち、腹に独特の波打つ刀紋が浮き上がってきた。

名工な研師によるものだろう。

そしてその青光が暗がりの中に伊右衛門の目を浮かせた。

しばらく魅入ったのち、静かに鞘に納めた……

チンッ

刀身が納まった刹那！

伊右衛門は何かの気配に気付いたが、それは遅かった。

目を大きく見開いた目線には、白裳を巻く帯が既に握り拳程の間しかないところまで来ていた。

(……不覚で御座った)

金縛りにあったわけではない。が、身体は動けかせなかった。

(このような間近までまったく気配は感じなかった)

焦りが全身に伝わり、妙な不快感が伊右衛門を襲う。

顔を上げる事もできない。

そして伊右衛門は頬に凍るような冷たさを感じ、息が上がった。

伊右衛門の口からは白い息が舞い上がり、その多さから動悸の激しさと、体温が上昇したのだと解った。

しかしそれも一時的な事。

伊右衛門は持ち前の冷静さで、徐々にその荒げる心搏を押さえていった。

頬に当てられたのは扇の白く美しい細い指。

その両指で伊右衛門の顎を上げた。

否応無しに、伊右衛門の目には扇の顔が映し出される。

(う、美しい……)

すると、扇はそつと顔を近づけ伊右衛門と唇を重ねた。

(……うっ)

何か違和感を感じる。

扇が伊右衛門の口内に舌を這わせだし、そつと離れた。

伊右衛門は口内に何か丸い物を残されたと感じたが、次の瞬間。

きゅっ

と、奥歯に擦り当たり音が鳴った時に、鬼灯と解った。

すると、また扇は口付けを迫り、伊右衛門は重ねだした。

その時、後ろの堂の扉が開くと、伊右衛門と扇は引き込まれるかのように、堂の闇に吞まれていった。

そのまま扇は伊右衛門の身体を欲し、着物が互いに乱れだす。

その時、闇に小さな燈が二つ現れ堂内の闇を薄明るく照らしだし、さらに畳のような触りが伊右衛門の背中に広がりだした。

(こ、これは幻か)

扇は容赦なく欲してくる。

伊右衛門の頭の中では拐わかされていることは承知の筈なのだが、完全に扇の美しさに魅了されていたのである。そして、いつしか伊右衛門も扇を欲していった。

妖艶な扇の身体は艶やかで、美しい曲線を描いている。

身体を重ねあつた二人は激しく悶え合う。

伊右衛門の身体は屈強な肉体。筋肉の固まりが浮き出ているが、そこには扇のやわらかい肌が隙間を埋め、吸い付くように重なる。

……二人は交わっていた。

互いに無言のまま、激しく、熱く、湿った吐息を漏らしていく。

唇は重ね合い、舌を這わせ、鬼灯の果実を絡ませながら、互いに湿らせていった。

伊右衛門は我を忘れていく。

その時、伊右衛門は腹部に何かが滴ってきたのを感じる。仰け反った扇の口の中で、熟し潤んだ鬼灯が弾け、赤い実は血のように口元から漏れていた。

伊右衛門はそれで我にかった。なんとか手の届く処に太刀が見え、それを手にすると、鞘先で扇を一気に押し退けたのである。

扇は俯いたまま、乱れた着物を肩に掛け戻した。伊右衛門は上半身はだけたまま、太刀を構える。

「あなた様は守られておいでで御座います」
突如、扇が呟いた。

伊右衛門の乱れた懐からは、寂蓮から授かった数珠が辛うじて引っ掛かり垂れ下がっていたのである。

すると、伊右衛門は冷静にその数珠を取ると、左手に巻き付けた。「私をどうなさるおつもりですか……」

伊右衛門は鞘から刀身を引き抜きながら、「悪いが、浄化させていただく」

扇は俯いたまま涙を流し、しくしくと啜り泣いた。しかし伊右衛門は強く言い放つ。

「拙者、鬼に対して情など持ち合わせてはおらぬ！覚悟されよ」

刀を振りかざしたその時、啜り泣いていた声は高らかに笑いだす。「あああつはつはつはつ……！！」

伊右衛門の手が止まる。刹那、扇は伊右衛門の体目がけて飛び掛かり、古びた堂を打ち壊しながら、二人は雪上に投げ出された。

伊右衛門は息苦しさを感じる。尋常ではない人力を超えた扇の手が、伊右衛門の喉に食らい付いていた。

「おぬしを喰い殺してくれようぞ」
透き通っていた扇の声が一変して、濁った太い声になっていったのである。

伊右衛門は刀の柄先で、力一杯扇の額を叩き割る。

瞬間、手がゆるんだのを感じ足蹴で突き放した。
伊右衛門は喉に手を添え、唾を一呑みし、頭を振って構え直しす。

「……是大神呪。是大明呪。は無上呪。は無等等呪。能除一切苦眞
……」

寂蓮等は本堂にて経を唱え、事の終止を祈っていた。

「お侍様大丈夫だろうか？」

「大丈夫だ！任せるしかねえ」

与吉と由蔵も只々願うばかり。

孫六も合掌していた。

額が割れ、血を流していた傷口は瞬く間に回復していった。

「……鬼の力」

そして、扇の爪が長く伸びだすと襲い掛かってきたのである。

一撃、二撃とまでかわしたが、三撃目は頬を擦り、血が滲む。

扇は薄ら笑みを浮かべた。

伊右衛門は冷静に次の手に講じる。

数珠を巻く左手に刀の刃を押しあて、数珠の隙間に見える自らの
手を斬りながら呟く。

「なうまく。しつちりや。じびきやなん。たたぎやたなん。あん。

びらじ。」

唱えながら刀身を下げ、血を一筋、刃先まで伝わらせた。

血が一滴、雪に染まった刹那！一気に踏み込んだ。

扇は怯んだが、迫る伊右衛門に一振り。しかし、それを低くかわ
すと、渾身を込めた伝達系の斬撃を下から扇の首に振り上げた。

鈍い音と硬い手応えが、腕を通じて伝わる。

それが何かを知った伊右衛門は即座に身を返し、回り除け、雪上に片膝を着いて構え直した。

「……きかぬか」

伊右衛門のはだけた上半身からは、湯気が立ちこめていた。

鬼燈

○最終話です

(前書き)

燃え盛る城。

その城内。

「扇……扇や……」

扇の父、城主でもある盛久は虫の息での乏しい声。
激しい雨が振り出した。

「この城は陥落した。盛久は自害したろう」

「もし生きていたら、どうなさいます!？」

「例え、そうであっても焼け死ぬのは必然じゃ」

「そうだの。我らは新しい殿のもとへ参ろう……」

複数の馬の蹄は泥を散らせ、遠く消えた。

しばらくすると、雨は炎上する城を鎮火したのだった。

その時、一部焼け崩れた残骸の下から手が伸び、汚れた煤だらけの腕を雨は洗淨する。

その手は雨を掴むかのように握られ、正しく生きている証だった。

「扇……扇や……」

間違いなく渾身の斬撃は、扇の首をとらえていたのにも関わらず、与えたのは衝撃のみに止まっていた。

「貴様からは嫌な臭がただよっている!かつて我らを斬り刻んだ刀の臭い」

伊右衛門は微動もせず構えている。

「名刀も我らに二度はきかぬようじゃの」

鬼に操られた扇は力づくで突進してきた。

伊右衛門は刀を突いたが弾かれ、体当たりをくらった。
体が宙に舞い、体五つ程の距離を飛ばされた。

蹲る伊右衛門。

「ほう。初めて貴様の背を拝借するが、観音菩薩が彫っていたとは
そう。伊右衛門の背には合掌して目を閉じ後光を彩し、やさしく
笑む姿の観音様が彫られていた。」

「拙者を守られておる」

「ならば、直ぐにでも息の根を止めれば、自らが背負う観音に導か
れるがいい」

そう言うのと、さらに勢いを増した鬼の力で吹き飛ばされた。

さらに、二撃、三撃と。

伊右衛門は吹き飛ばされ、壊れた堂の前に転がった。

(左腕と肋骨が砕けたか……)

長く束ねた黒髪が乱れ、口内を切り血を垂らす。整った顔は腫れ
だしていた。

足を一歩動かしたその時、伊右衛門は鈴の音を微かに聞いた。

(これは!?)

そう自らが身につけていた鈴の音。

それは今、足元に埋もれていたものだった。その鈴は長紐に付け
られ、それをたどる先には脇差の柄先に結ばれているものだった。

見た目は決して良くない。さらに太刀ほどに洗練された造りでは
なく、しかも古びて鞘の一部は朱塗りが剥けている代物。一見は父
の形見に見える。

(ほどけていたか)

扇は伊右衛門が自力で起き上がるのを待っていた。

「もう終いじゃ。飢えをやわらげる」

勢いよくとどめを刺しに向かってきた。伊右衛門の向けた背中に
浮く観音様ごと貫き通すため。

(まだ足が動く……)

扇が振りぬいた瞬間、身を返し回り、片膝をつき、太刀を扇に向
かって投げ付けた。それは真つすぐ扇の顔目がけ向かったが、いと
もたやすく弾かれた。

「なまくら刀でワシは……」
伊右衛門は鈴の付いた紐を引きちぎり、脇差を抜いた。
外見とは別に刀身は太刀よりも洗練され、され、光彩を放つ代物が目を覚ました瞬間だった。
扇が太刀を弾いた腕に一瞬、隠れた間、光る閃光が向かっているのに気付いた刹那。

ツツ

それは静かな音だった。

それと同じく、本堂にいた孫六の白濁した眼からは、扇と似た白糸のような涙が一筋だけ流れた。

「扇……扇や……」

その言葉を残すと、孫六は蹲り倒れこんだ。

与吉と由蔵は驚き、孫六を強請り、名を叫んだ。

「ま、孫爺！しっかりせえ。孫爺！」

「寂蓮様！寂蓮様！」

与吉等の叫び、呼ぶ声を打ち消すかのように、一心不乱に経を唱えるだけだった。

その目から涙を流しながら。

（盛久殿。姫殿の見守りお疲れさまにございました）

その夜、寂蓮が唱える経が止むことはなかった。

扇は何もなかったかのように立ち尽くし微笑む。

「ふ、ふっふっふっ……脅るか……うぐっ!？」

伊右衛門は合掌し、立ち上がった。

「拙者が持つ『角落とし』は脇差でござる。太刀ではござらん」

扇は一步、また一步と伊右衛門に近づくが、足を進める度に胸元に突き刺さった角落としから血が滲みでた。

そして伊右衛門の手前で雪崩落ちたのである。

伊右衛門は扇の瞳を覗き込んでいるとき、雪に籠もる物音がした。それは勝正の姿。

馬上から降り立つと、深々と頭を下げる。

「……忝のう御座った」

そしてそのまま扇を抱き抱えた。

伊右衛門はそつと角落としを引き抜き鞘に納めた。

扇は震える指で勝正の頬に手をあて、

「嗚呼、勝正。勝正」

勝正は優しく微笑む。

「私はそなたに顔向けできまいぞ」

「よいよい」

「赤子がほしかったのじゃ」

「解っております」

扇は涙を流しす。いつのまにか取付いた鬼の御霊は浄化され、扇の肉体も消え、魂と成り代わった。

「よいのか、よいのか、私目を許したもうか……」

勝正は無言で強く包容した。

そして扇を抱き抱えたまま風丸にまたがると、

「伊右衛門殿。世話に成り申した」

「浄土で達者にするでござる」

再び勝正は深々と頭を下げた。

「ささ、扇よ。我らが迎う場所に共に参ろうぞ」

「はい。何処までも……」

そのまま二人が桜木道の奥に迎うと姿が消えた。しかし、その瞬間！ 猛烈な吹雪が吹き荒れたのである。

伊右衛門は乱れたままの着衣を着直し、落ちた太刀を拾うと、刀

身を眺めた。

「すばらしい。刃こぼれ一つない。無名の鍛冶屋がうったにはしては稀に見る名工。さすがは戦場刀、胴太貫の一種と見込んだ拙者の目に狂いはない」

太刀と脇差を帯に通し、角落とし封印の鈴紐と寂蓮から授かった数珠を懐にしまった時、勝正等が消えた道筋に何かを見つけた。

それに近づいていくと、なんと、雪面に突き出した鬼灯。

赤く熟した鬼灯はまるで雪上に火を灯した提灯のように見えた。少なくとも今の伊右衛門には……

あの日以来、“鬼”は現れなくなったという。

村村に平穏な日々が続いた。

初夏に寂蓮と与吉、由蔵と村の衆数人で桜木道に新しく堂を建て、中に観音像とその堂脇に三対の墓石がたてられた。

「あのお侍様は今、何処で旅しておるんじやるか」
与吉がふつと溢した。

寂蓮は眩しく日差しに手をあてがうと山の方を眺め、

「大方、あの山の向う辺りで、扇姫様に似た境遇な御方を救って下さってらっしゃるのではなからうか……」

初夏の蝉は煩く鳴き、山々に響き、鬼灯は心地よい風に吹かれて揺れた。二つ茎がよく寄り添っていたのである。

終

(後書き)

○作者の嘆き。徹夜で頭朦朧です。編集を二度、三度致しましたが、誤字脱字などの誤りがございましたら申し訳御座いません。今現在執筆中の作品や次回作を頑張ります。本作品『鬼燈』を読んで頂き有難う御座ました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031a/>

鬼燈

2008年8月29日17時53分発行